28U-pm12

病棟薬剤師の入院時持参薬確認と服薬計画立案によるポリファーマシー改善効果

○中山 佳代子[1], 櫻井 香織[1], 杉本 充弘[1], 米澤 淳[1], 深津 祥央[1], 萱野 勇一郎[1],
松原 和夫[1]（[1]京大病院薬）

【目的】近年、臨床的に必要以上の薬剤が処方される「ポリファーマシー」が問題となっている。このような医薬品の不適切な使用は、薬物相互作用や薬物有害反応の増加を引き起こす可能性があり、また、医療費増大にもつながる。ポリファーマシーの解消には、かかりつけ薬局の薬剤師による処方薬管理のほか、入院時の持参薬を管理する病院薬剤師も重要な役割を担うと考えられている。そこで本研究では、病棟薬剤師による入院時の持参薬確認と服薬計画立案による、ポリファーマシー改善の効果について調査した。

【方法】京都大学医学部附属病院において、全病棟薬剤師に対して入院時の持参薬確認と服薬計画立案に関する業務内容調査を行った。調査期間は 2014 年 8 月 25 日から 9 月 5 日までの 2 週間とし、新規入院患者を対象とした。調査内容は患者ごとに持参薬数、持参薬についての処方提案とその受入の可否、および薬学的介入内容とその転帰等を記載する形式とした。

【結果・考察】調査期間における入院患者数 694 人のうち持参薬のある患者が約 90%であり、平均持参薬数は約 6.8 種類であった。持参薬を吟味して中止や減量、変更を含む処方の提案を行った件数は 119 件（約 20%）であり、70%以上の提案が医師に受け入れられた。中止、減量の提案はそれぞれ 31 件、16 件であり、その受入率はそれぞれ 83.9%、43.8%であった。また、約 10%程度の患者で残薬が多く、残薬数整理を医師に提案した。以上の結果から病院薬剤師による入院時の持参薬管理は、医師等の負担軽減につながるだけでなく、服用薬剤数の減少に関与していると考えられ、ポリファーマシー改善に貢献している可能性が示された。